

築地市場と新潟県村上市を視察しました 7月4～6日

任期最後の年なので、全議員で同じ場所を見ることになり10人が参加しました。

(その1) 東京都中央卸売市場

築地市場を視察

豊洲市場の開場を10月11日に控え、築地と豊洲の現状を知っておきたいと思っていましたが、開場と移転の準備で忙しい中、都の職員が対応してくれました。豊洲市場については、東京都は毎月2回、都民向けの見学会を開いています。私も2回応募しましたが希望者が多く抽選にもれてしまったので、今回築地市場の最後の姿を見学できたことは幸運でした。

市場の役割 まずおどろいたのは、予想を超えた施設の老朽化でした。昭和10年（1935）の開場から80年以上も経ち「古く、暗く、不便」な状況になっていました。狭い道、大勢の人の往来や車の渋滞のなかで、鮮魚や青果などの生鮮食品の売買が行われていました。昭和のレトロな雰囲気は捨てがたいとは言え、新し



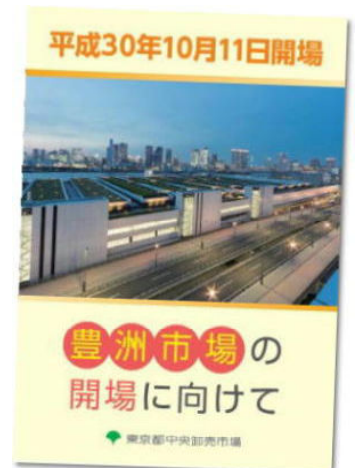
い施設整備の必要性を実感しました。

物流や価格の安定性を維持するために、市場の役割は重要です。水産物や青果物の取り扱い規模も国内最大規模（水産物は世界最大級）で、これまで築地市場が果たしてきた役割の大きさを知りました。そうしたなかで賛否両論あったとはいえ、平成13年（2003）に豊洲への移転が決まったことは良かったと思います。移転をめぐるっては、小池知事に交代してから紆余曲折ありましたが、ようやく意見集約もできつつあるようです。

豊洲市場 現地見学はかないませんでした。築地市場内の管理棟で詳しい説明を受けました。施設のコネクトは 1. 食の安全・安心の確保（品質・衛生管理の強化） 2. 効率的な物流の実現（車利用に対応した設計） 3. 多様なニーズへの対応（加工や配送） 4. 環境への配慮 5. まちづくりへの貢献（賑わいの創出）とのことでした。

現在、主な物流はトラックで行われています。車利用の利便性に対応して素早くスムーズに物流が進むように設計されています。場内には消費者ニーズに対応して、仕分けや加工、配送もできる設備もあります。環境に配慮して、一部太陽光発電や屋上緑化もしています。ただ、「まちづくりへの貢献」については道半ばのようです。

開場が2年遅れたおもな原因である「地下水管理システム」に関する説明もありました。観測井戸の水位測定の箇所や回数を増やし、即日結果を公表するなど改善点がみられます。追加対策工事も完了し、専門家会議で安全の評価もされたそうです。私はおおむね納得できました。



前ページより続く

市場への期待 巨大な施設なので電力供給が確保できるのか懸念されますが、エアコンにはガスを使用し、全体の供給は確保できているので安心してほしいとのことでした。また、鮮魚など売れ残りをどうするのかも気になりましたが、値下げするなどして鮮魚も青果も原則としてすべて売り切るそうです。

移転までの作業、住民への説明、移転後の築地再整備など課題は山積みです。ただ、まずスムーズに移転が行われ、都民見学会や情報公開などを継続して住民の理解を得る努力を続けてほしいと思いました。そして、今までどおり都民だけでなく世界からも期待される市場となるよう願っています。

(その2) 自然石利用の護岸工事と市民による町屋再生 (村上市)

自然工法による護岸

新潟県の最北部にある村上市は、長い海岸線があることで知られていますが、繰り返し押し寄せる日本海の荒波によって海岸線が徐々に浸食され、海岸を守るはずの松林も崩されている状況でした。アカマツの国有林を守り海岸線を保全するために新たに考えられた工法が「自然石による護岸工事」です。



8個の自然石をアンカーでつないでコンクリートで固め、大きなブロックにして設置する工法で、まだ施工距離は短いものの海岸線の浸食は抑えられているとのことでした。八丈島でどう活かせるのかについては工法などに課題が残りますが、環境への負荷が少ない工法を取り入れた村上市の姿勢には共感しました。

市民による町屋再生の取り組み

江戸時代には村上藩の城下町として栄え、今も町屋造りの商店や民家が点在しています。平成9年(1997)、道路拡張をとまなう大規模な近代化により地域活性化をはかるという計画が起こります。これに異議をととなえ、民間のグループが町屋再生に取り組んだのがきっかけで、平成16年(2004)にできた「むらかみ町屋再生プロジェクト」につながっていきます。全国から寄付金を募り、空き家にな



った町屋造りの建物に100万円の補助金を出して再生する取り組みです。10年間で30軒が再生されたそうです。当初はこの運動に反対もあったものの、美しい町並みと観光客の増加に住民の意識が変化し、やがて行政も支援するようになったといいます。案内してくれた市職員の自信と誇りに満ちた表情が印象的でした。

議員講演会

5月23日(水) 東京グリーンパレス



年に1回、東京都の13町村の議員全員が参加して行われる研修会です。今回のテーマは「災害に強い地域づくり」で、講師は山崎 登氏(元NHK解説委員、国土舘大学 防災・救急救助総合研究所)。

さすが元アナウンサー、語り口は絶妙でした。最近では噴火や地震、洪水や土砂くずれが全国各地でおこっているの、現地の取材をもと

に示す具体的な指摘や提案が、ひとごとではなく参考になりました。



2018年6月議会 一般質問



1. 航空路の3便体制を維持するために

特定有人国境離島交付金事業のひとつとして、航空運賃の低廉化がはかられ（片道13,790円の島民アイきっぷ）、9ヵ月が経過した。ただ、住民に好評なこの支援策が永続的なものなのかは不透明だ。いずれ3便が2便に減便されるのではないかと不安は払拭されているわけではない。将来にわたって住民の足を確保するためにも町が全日空の株を購入し、企業との交渉にそなえておくべきだと思う。

- (1) 全日空の株を購入する考えはないか
- (2) 運賃体系が変わり往復運賃がなくなるが、町の対策は



町 (1) 一般論としては株の保有は可能。1%を保有するだけでも15億円以上となり、町の財政では多額すぎるので、現在株の購入は考えていない。

- (2) 往復割引がなくなるが、全日空の多様な割引運賃があるので選択してほしい。

再質問 (1) 地方公共団体の株の保有は議会の承認が必要となるが、法的には問題がない。実際に自治体による株保有の例は数多くある。交渉権はなくても全日空株を保有する利点はあると思う。町に購入の考えがないので仕方ないが、町長は保有する考えはないか。(2) 多様な割引メニューを観光客に対してわかりやすくガイドする必要がある。観光協会と連携して広報活動をすべき。

町 (1) 株保有の利点はなくはないと思う。また、株数は言えないが町長はすでに株を保有している（副町長も）。(2) 観光協会と連携して対策をたてる。

2. ふるさと村の移築計画の進捗状況は

観光客が増えているのに観光スポットのひとつがなくなることは大きな損失だ。なるべく早く、そして以前のたたずまいを損なうことがないような移築を実現させてほしい。

- (1) 移築の候補は決まっているか
- (2) 候補となる民家をどのように改修するかについての具体的工程表はできているか

町 (1) 候補はある。7月中には具体的な条件を提示してもらえる。
(2) 条件の提示後、スムーズにいけば今年度中に実施設計に入る予定。

3. 歴史民俗資料館の一時移転の内容を明らかに

支庁展示ホールへの一時移転は決まったが、開館時間など具体的な内容が明らかになっていない。観光業者や住民に対し確かな情報を発信すべきでは。

- (1) 開館日、時間
- (2) ガイド、案内係の人数
- (3) 検討委員会への報告は

町 開館の詳細については、すでに地元紙には掲載し、検討委員会には議会前に報告した。

再質問 場所や開館時間や料金を示す案内パンフを、観光業者に配布すべき。

町 開館の詳細については町ホームページ、観光協会でも周知。展示ホールのポスターを各所に貼ってもらっている。パンフは検討する。



6月議会での発言

■多目的ホール使用時の技術料について

演劇や演奏などでホールを使う時、東京から技術者を伴って来島することもある。その場合でも、音響と照明と舞台でそれぞれ18,000円、合計54,000円を担当の技術者に支払うことになる。音響や舞台の専門家であっても支払わねばならないしくみには納得がいかない。

町 専門家が同行していても、町のホールの装置を使うことになるので、それぞれの技術者に支払っていただいている。料金については妥当と考えている。

■粗大廃棄物の処理について

数年前に粗大ごみに対応した破砕機を導入し、有明興業に設置してあるとの説明だったが、稼働しているのか。破砕後はクリーンセンターで焼却しているのか。持ち込んだ人に処理料を少額でも負担してもらうべきではないか。

町 稼働している。畳やマットや布団などの粗大ごみを破砕機で小さくし、それをクリーンセンターで焼却している。現在は無料だが、有料化についてはゴミ処理問題協議会で検討していく。

歴史民俗資料館 一時移転先（支庁展示ホール）で開館

3月31日で閉館となった資料館。移転先に展示する資料の選択や、残りの資料を保管場所に移動する作業、また支庁展示ホールの内装工事などがあったため、一時移転先での開館は6月9日になりました。



受け付けコーナーやビデオ映写も設けられていて、スペースは狭くなったものの、コンパクトに比較の見やすくまとめられていました。

ただ、全体にパネルの割合が多く、しかもパネルの文字が小さいので、このようにたくさんあると読まずに通読されてしまいそうです。まだ、空きスペースもあるようなので、現物を展示する工夫が必要だと思いました。

編集後記



6月22日～27日に毎年恒例の小笠原親善訪問団が小笠原を訪問しました。八丈からは159人が参加し、村の熱い歓迎を受けたと聞いています。

八丈町議会からは2人が参加しました。お土産にいつもパッションフルーツをいただくのですが、今年はそれに加えて「鯨肉のジャーキー」と「マグロのハム」もありました。開発にさぞかし時間や労力がかかったのではないかと想像しながら味わいました。八丈でも様々な加工品が考案されていますが、こうした取り組みへの支援がますます必要になると思います。

